



本堂奥の間

越後時代の上杉謙信の書が拓本として飾られている

本堂

大河ドラマ「天地人」の人気から、多くの参拝客が訪れる林泉寺本堂



毘沙門天

謙信(当時、長尾景虎)が7歳で林泉寺に預けられとき、ここで初めて出会ったとされる毘沙門天



直江兼続夫妻の位牌

兼続の法名は達三全智居士。右にはお船(せん)の方が祀られている



林泉寺庭園

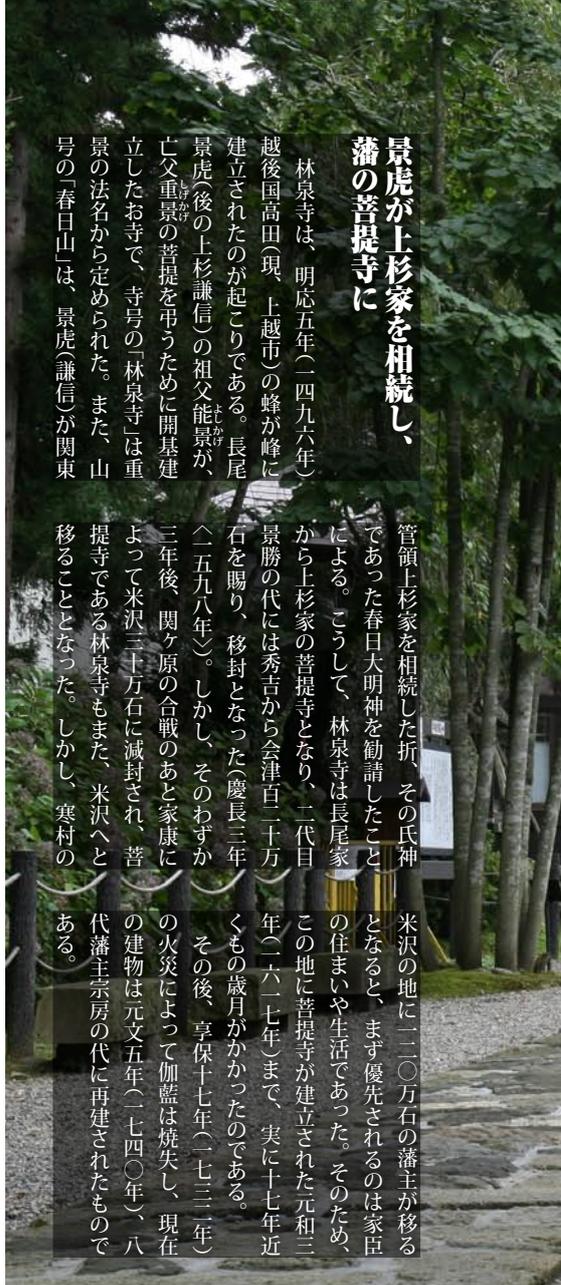
本堂裏に造られた庭。西方の斜平山を借景した雄大な造りで、米沢三名園の一つとされる



お手伝いをいただいた松林寺の杉沼俊徹師(右)と瑞雲院の中川大悟師(左)

山号額

本堂入口に飾られている「春日山」の額。龍の彫り物が見事



景虎が上杉家を相続し、藩の菩提寺に

林泉寺は、明暦五年(一四九六年)越後国高田(現、上越市)の峰が峰に建立されたのが起こりである。長尾景虎(後の上杉謙信)の祖父能景が、亡父重景の菩提を弔うために開基建立したお寺で、寺号の「林泉寺」は重景の法名から定められた。また、山号の「春日山」は、景虎(謙信)が関東

管領上杉家を相続した折、その氏神であった春日大明神を勧請したことによる。こうして、林泉寺は長尾家から上杉家の菩提寺となり、二代目景勝の代には秀吉から会津百一十萬石を賜り、移封となった(慶長三年(一五九八年))。しかし、そのわずか三年後、関ヶ原の合戦のあと家康によつて米沢三十万石に減封され、菩提寺である林泉寺もまた、米沢へと移ることとなった。しかし、寒村の

米沢の地に二〇万石の藩主が移るとなると、まず優先されるのは家臣の住まいや生活であった。そのため、この地に菩提寺が建立された元和三年(一六一七年)まで、実に十七年近くもの歳月がかかったのである。その後、享保十七年(一七三二年)の火災によつて伽藍は焼失し、現在の建物は元文五年(一七四〇年)、八代藩主宗房の代に再建されたものである。

綾御前と兼続が支えた菩提寺建立と町づくり

米沢の地に菩提寺が建立されるまでの約十七年間、林泉寺はどこに預けられていたのか。確かな資料は残されていないが、実は福島県に「林泉寺前」という古い地名が今もあり、菩提寺再建までの期間、この地に置かれていたのではないかという説がある。この間、一刻も早い建立に尽力したのが綾御前(仙桃院、謙信の姉で景勝の母)であった。私財までも投げ打った、その懸命なる功績を讃えて、綾御前には中興開基の称号が贈られている。

一方、米沢の町づくりに敏腕を振るつたのが景勝の家臣、直江兼続である。才略にたけた兼続は、城下町の整備や荒地の開拓、治水事業のほか、産業の開発や学問の興隆など、あらゆる面で米沢開拓の大恩人とされている。「義」と「愛」を重んじた兼続が、兜の前立てに愛の字を掲げたことは広く知られているが、この「愛」とは「慈悲」を意味するもので、深い慈しみの心の表れとされている。

直江家の菩提寺であった徳昌寺は、兼続の死後家系が絶えたことから廃絶となり、兼続夫妻の墓は林泉寺に移された。しかし、ここに祀られているそのお墓はひと際立派で、このことから兼続が藩にとつていかなる重臣であったかをうかがい知ることができる。

実は、ここ林泉寺には奥方や子女縁者の墓が多く、藩主の墓は「上杉家廟所」に祀られている。こうした経緯にも、長い歴史の流れの中で、城下のお寺が歩んできた時代の重みが偲ばれる。

(関連記事、裏表紙に続く)